

＜巻頭言＞

第2巻第1号の発刊にあたって

山田礼子
同志社大学

このたび、『初年次教育学会誌』第2巻第1号を刊行する運びとなった。学会誌を発行するに当たっては、編集委員長、副編集委員長をはじめ編集委員会の皆さんには大変な編集作業に当たっていただき、心から感謝をする次第である。

今号からは、会員による自由投稿論文の募集も開始し、研究論文、事例研究論文の計18本の投稿があったと伺っている。詳細については、川嶋編集長が編集後記に書かれているが、学会設立後間もないことから、はたして自由投稿論文が集まるだろうかと関係者一同は心配していたのだが、杞憂に終わってうれしい限りである。採択された論文はもちろんのこと、採択には至らなかった論文の中にも初年次教育学会のテーマにふさわしい力作が多かったと編集委員会からはうかがっている。数多くの投稿は、初年次教育が研究対象として定着しつつあることを示している。昨年の第一回大会では、「日本の初年次教育の展開—その現状と課題—」というタイトルで、日本におけるこの10年間における初年次教育の展開についての基調講演をおこなった。その際、急速に初年次教育が拡大してきている現状とそうした拡大のなかで、初年次教育自体の多様化についても触れたのだが、投稿論文のタイトルを拝見する範囲でも、こうした拡大と多様化の様相が見て取れる。初年次教育学会に所属している会員は、様々な学問的背景を持っているという学際性が特徴であると同時に、実践やプログラム構築にかかわっている職員が会員となっているケースも多い。いわば、初年次教育という領域では、教職協働が日常化している可能性があるのではないだろうか。

学会は、研究成果を発表、交換することによって、学問としての体系性を確立し、研究蓄積に寄与していかねばならないという性格を持つと同時に、初年次教育のような実践性や効果的なプログラムや教育方法の開発が求められる新しい領域では、会員相互の交流を通じてのノウハウの伝播や教職協働という横断的な協力体制の進展が不可欠である。

学会では、会員のニーズにこたえるべく今後も努力をしていく所存であるが、学会誌には論文だけでなく、学会として提供しているワークショップの概要や会員による自著紹介なども掲載し、情報の伝播としての役割も果たすように企図している。ぜひ、皆様には本学会誌をご一読いただき、初年次教育の実践やプログラム構築のヒントにいただければ関係者一同にとってもありがたい限りである。

(初年次教育学会会長)